

核がもたらす分断を乗り越える

橋本花

ピンクでポップなキノコ雲が、ソーシャルメディアのトレンドに上がってきた。78年目の原爆の日を前に、核兵器を軽視し、消費するような動きである。アメリカでは、原爆の開発・製造を主導した物理学者オッペンハイマーの伝記映画と、着せ替え人形バービーの実写映画が同時に公開され、両映画をコラボさせるファンアートが多数作成され、投稿された。その多くが、キノコ雲をバービー風に可愛らしく描いている。投稿した人たちは、どうしてこのようにキノコ雲を扱えるのだろうか。私は、この現象にこそ、「終末時計」が過去最短となったことを感じた。

「はたして核兵器は人を、国を、そして地球を守れるか？」という問いの中で、私は「人」という言葉に注目せざるを得なかった。キノコ雲をポップにしたのは、他ならない「人」だからだ。「核兵器は人を守れるか？」という問いは、核兵器が何から人を守ることを想定しているのだろうか。一般的な核抑止論は、核の持つ強大な破壊力によって、戦争つまり武力衝突を抑止できるという考え方だ。つまり、核兵器は、核を含む武力による破壊から、人を守ると想定されている。しかし、武力による破壊を実行するのもまた人である。すなわち、「核兵器は人を守れるか」という問い自体が、核兵器によって守られる人と、核の脅威にさらされる人を分断しているのではないだろうか。たとえば、ロシアの保有する核兵器によって守られるのはロシア市民であり、脅威にさらされているのはウクライナの人たちだといえるだろう。

ロシアの例を見ても、核抑止力を利用して、かりそめの、ある程度の守備は一次的には可能かもしれない。しかし、核兵器を含む兵器は、攻撃対象と守る人々を明確に区分せざるを得ない。したがって、分断をもたらす。人々を分断する論理が、恒久的な平和をもたらすことはない。だから、核兵器は何も守ることなどできないのだ。

そもそも「守る」という行為は、恐怖や不安によって起こる。「他者から侵されないように防ぐ」という意味があるように、「他者」に対して恐怖や不安があるから「守る」のだ。つまり、他者を想定しなければ、守るという行為そのものが成立しない。グローバリゼーションが進み、否応なく、世界の人々とつながらなければならなくなった。多様性をポジティブに捉えることは必要で求められているが、実際は複雑で難しい。多様性という言葉だけが広まり、私たちは本当の「多様性」を理解できてはいない。ただ他者を他者としてレッテルを貼って受け入れるのではなく、他者を「知る」必要がある。知らないということは、恐怖を生み、分断を促進する。その恐怖と不安によって、人々は防衛する必要を感じ、核兵器に頼る。私たちは、「他者」から身を守るのではなく、他者を知り、「共存、共生」しなくてはいけないのである。

そのためにも、お互いの理解を深めるのは重要である。相手に対する知識が乏しいと、無自覚のうちに分断を促進してしまう。日本人とアメリカ人の間の原爆への認識の大きな違いがあ

るように、無自覚のうちに溝は深まっていく。無自覚な「私たち」は「私たち」にだけ通じるネタ、つまり内輪受けに興じるのだ。ピンクのキノコ雲は、その象徴だろう。「私たち」の外側にいる人々については、「私たち」のセンスを理解できない人として切り捨てる。いや、無自覚だからこそ、切り捨てる感覚すらもなく、恐怖や不安もポップにしてしまう。しかし、私たちはこれを他山の石とすべきだ。日本も、アメリカの核の傘下において、守られている。まずはこのことを自覚して受け入れ、と同時に、「他者」への分断をしない選択をしなければならぬ。そうしてこそ、核なき未来が訪れるのだ。